

日本中國學會報 第71集  
2019年10月12日 発行 抜刷

学界展望 (文学)

齋藤 希史  
大木 康  
谷口 洋  
田口 一郎  
上原 究一  
(執筆協力)  
鈴木 将久

報』)、東涯の卦変説の変化について旧説の見直しを試みる「伊藤東涯の卦変説—その早年と晩年との差異」(『中国哲学』45・46)がある。阿部光磨「伊藤仁斎と陽明学—羅近溪との関係を中心に」(『日本儒教学会報』2)は、朱子学や禅学とともに陽明学を批判した仁斎の、その問題意識における近溪思想との構造的類似性を指摘し、宣芝秀「伊藤仁斎の学問観の再把握—〈性-道-教〉、〈意味-血脈〉、生生的「道統」論の体系」(『日本思想史研究』50)は、仁斎が、孔孟の間で受け継がれる道と実践的な規範との双方を日常的に実践することが道統に繋がる方途と考えていたことを述べる。

礼制の受容に関する研究としては、吾妻重二「荻生徂徠および伊藤東涯・東峯と儒教葬祭儀礼」(『東アジア文化交渉研究』11)が、同編『家礼文献集成 日本篇七』(関大出版部)に収録される徂徠・東涯・東峯らの喪礼関連資料により、彼らがともに当初は朱熹の『家礼』に関心を示しつつも、徂徠は次第に『家礼』とは異なる儀礼を構想するようになったのに対し、東涯・東峯は『家礼』に忠実であろうとしたことを論じる。松川雅信「近世後期における闇齋学派の思想史的位置—儒礼実践に注目して」(『日本思想史研究会会報』34)は、稲葉黙齋・中村習齋が寺請制度のもとでの儒仏混淆的な喪礼を構想し、かつ徂徠批判を意図してそれを「修己」の実践と位置づけていたことを指摘する。韓淑婷「佐久間象山における幕藩制的秩序観の一考察—『喪礼私説』の「成服」項に着目して」(『九州中国学会報』56)は、象山の服喪説が中国の尊卑貴賤の序列を明確にする五服制度だけでなく、江戸時代の家父長制をも視野に入れていたことを論じる。

最後に、教育の分野における漢学受容関連の研究として、伊藤大輔「寛政期朱子学者の教学思想の論理と意義—広島藩儒頼春水の主張」(『九州史学』178)は、春水が広島藩内の「朋党」争いを回避し、かつ藩の家風を重んじるために、藩の教学を朱子学に統一するよう主張したと述べ、殷曉星「近世日本の清聖論受容と民衆教化」(『歴史評論』824)は、備中・美作などで代官を務めた早川正紀の『久世条教』や福井藩公認の学塾・恵迪齋における「郷約」が、それぞれの地域の実情に応じながら民衆教化に関する清朝の勅諭を改変して用いたことを紹介する。湯城吉信「懷徳堂における漢作文実習」(『中国研究集刊』64)は、題名通りの事例を懷徳堂関係資料によって解説する。この資料には、日本の史談などを複数の人物が漢文で書き換えた文章が載る。なお懷徳堂研究会の研究成果が、既発表論文をもとに竹田健二編『懷徳堂研究 第二集』(汲古書院)としてまとめられた。

## ●文 学

### はじめに

すでに周知されたように、従来、各大学の研究室単位で担当されてきた学界展望の執筆については、本年から大きな変更があった。ただし、依頼を受けた段階では研究室単位としてであった経緯もふまえ、本年は東京大学中国語中国文学研究室(代表:齋藤希史)の担当として、学内の関係教員による執筆ととりまとめを行った。

展望の執筆にあたっては、2018年に日本国内で刊行された単行本を中心に取り上げることとしたが、必要に応じてその範囲を超える成果にも言及した。なお、本年の分類は、「総記」「先秦・漢」「魏・晋・南北朝」「唐・宋」「元・明・清（詩文）」「元・明・清（戯曲小説）」「近現代」とした。齋藤以外の執筆者は、項目順に、大木康、谷口洋、田口一郎、上原究一（「元・明・清（戯曲小説）」執筆協力）、鈴木将久である。

## 一、総記

「総記」については、図書分類上の「総記」という項目にこだわらず、「比較文学」「日本漢文学」「書誌学」に関する著作もここで言及することとした。

最初に、井波律子『中国奇想小説集 古今異界万華鏡』（平凡社）。六朝から清末までの26篇の小説の現代語訳と解説からなるアンソロジーである。著者ならではのなめらかな訳文をたどりつつ解説にも目を通せば、異界を語る小説の系譜、著者の言う「奇想小説」が中国文学の一つの大きな柱になっていることがよくわかる。「桃花源」「枕中記」「牡丹灯籠」のような読者にもなじみのある作品を入れつつ、「枕中記」を逆転させた「欲望の悪夢（原題「反黄梁」）」、19世紀後半の小説として読みごたえのある「少女軽業師の恋（原題「秦二官」）」を掉尾に配するなど、近現代文学への流れも感じられるように工夫され、これらの小説が他地域の文学とも通じる「奇想」をもつものであることが浮かび上がる。翻訳が文学を外側に開いていく営為であることが、それを熟知している著者の手によって示されている。

次に、中鉢雅量『中国古典叢林散策 中鉢雅量遺稿集』（汲古書院）。「中国古典散策」「敦煌歌辞訳注」「敦煌文献の環境」「敦煌禅研究」の四部から構成され、著者が晩年にかけて力を注がれた敦煌文献研究の広がりを知ることができる。編者の田仲一成氏が「序」で言われるように「文献学者であり民俗学者であった」著者の学風が一つ一つの論述や校注にあらわれている。著者は、「文献」と「民俗」をつないだばかりでなく、敦煌という場を軸にして、「禅」の受容のされかたにも注目をしている。そこには文学であるかないかといった区分の意識はない。第三部の「敦煌文献の環境」というタイトルは編者によるものであろうが、たしかに著者は、ある文献を手にしたとき、必ずその「環境」に目を向けるという姿勢をつねに保ち、さらに文献の「環境」を全体として捉えようとするのが、「口語」や「民俗」、そして「禅」への関心を生んでいる。

上記2点はいずれも中国文学の広がりを示すものとして読まれうるが、朴美子『韓国古典詩における隠逸の心とその生活 中国古典詩との比較を中心として』（風間書房）はさらに地域的な広がりがあることを教えてくれる。韓国の古典文学（漢文学）については、中国においても日本においても関心が近年高まりつつあるが、日本語で書かれたもの、日本語に翻訳されたものはなお少ない。

本書は、「隠逸」という東アジアの古典詩文世界に共有される概念を軸にしなが、中国と韓国の古典詩（漢詩）にあらわれた「隠逸」について、例えば、菊と蓮への好尚の差異、「帰去来」や「漁父」のモチーフの韓国文学における受容と展開などを論じる。こうした研究は、古典詩文が中国のみならず、言語を異にする朝鮮半島や日本列島にお

いても広く読み書きされたことの意味、たとえば古典詩文のもつ機能は何であったかを考える上でも重要であり、また、韓国古典詩がどのようなものであるのかという知識を日本の研究者が得る機会ともなる。

日本漢文学の研究もまた、近年、日本国内のみならず国外からも注目を浴び、国際的な研究領域になりつつある。その成果をここで網羅することはできないが、本年は、『懐風藻』についての研究に進展があったことに言及しておこう。すなわち、土佐朋子（編著）『静嘉堂文庫蔵『懐風藻箋註』本文と研究』（汲古書院）および『早稲田大学日本古典籍研究所年報』11に掲載された「懐風藻注釈稿」である。前者は、静嘉堂文庫に蔵される今井舎人（鈴木真年）の自筆稿本『懐風藻箋註』（1865序）の翻刻と研究。『懐風藻箋註』は『懐風藻』の現存する注釈の中では最も古いもので、土佐氏によれば、当時の『懐風藻』解釈が伝記や史実との関連に興味があるのと異なって、この注釈は漢籍にもとづいて用例を指摘するという点で特異だとされる。鈴木真年の学問について云々することは本欄の範囲を超えるが、『懐風藻』が8世紀の東アジアにおいて編まれた古典詩集であることを正しく把握する上でもこうした注釈は重要であり、また、それについての研究が堅実になされることもまた評価されよう。こうした文献学的研究の進展およびその方法の精緻化の流れにおいて、後者の「注釈稿」（土佐氏も含めた8人による8篇の訳注）が示されたことにも意義があろう。（齋藤希史）

書誌学では、宮内庁書陵部蔵漢籍研究会『図書寮漢籍叢考』（汲古書院）が特筆される。慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の住吉朋彦教授を中心とする研究会メンバーが平成24年から平成28年にかけて、科研費等により、宮内庁書陵部に蔵される図書寮文庫の漢籍調査を行った成果である。この研究の成果は、本書のほかに「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」と題するデジタルアーカイブとしても公開されている。本書は、研究会メンバーによる9篇の論文を取めた論説編、アーカイブ公開を記念して行われたシンポジウムの講演録、そして調査を行った漢籍の図録編（奈良朝写経、漢籍旧鈔本、宋版の三部）からなる。とりわけ、カラー図版を載せる図録編の、各書物についての詳細な記録は、今後の漢籍書誌情報の亀鑑ともなるべきものであろう。

欧米に目を転ずれば、Wilt L. Idema, *Mouse vs. Cat in Chinese Literature* (Seattle: University of Washington Press) は、『詩経』『史記』から、清末・民国期の宝巻や民間歌謡に至る、鼠と猫をめぐる中国の文学作品の流れを描ききっておられ、目を開かれる。同氏には、骸骨をめぐる中国文学史である *The Resurrected Skelton: From Zhuangzi to Lu Xun* (2014) もある。（大木 康）

## 二、先秦・漢

中国文学の邦訳が次々刊行される中で、『詩経』や『楚辞』の邦訳には品切れ・絶版が目立つ。活況を極める中国古代研究においても、歴史・思想・言語と異なり、文学に関する成果は少ない。古代文学研究は、いったいどうしたのだろう。何をなすべきなのだろう。

牧角悦子『経国と文章 漢魏六朝文学論』（汲古書院）では、賈誼の賦から『文選』

序に至る多様な対象が論じられるが、それを貫く問題意識は、むしろ付論として取められた「文学研究者への挑戦状」に示されている。この文章は、もともと渡邊義浩著『古典中国』における文学と儒教』（2015）への書評として書かれた。渡邊氏の著作は、後漢における儒教的「古典中国」の定立を背景に、漢魏晋の文学における儒教観念の浸潤を論じたものである。牧角氏は、近代の「文学」観念にとらわれずに、対象に即して儒教的な「文」の観念を追う渡邊氏の取り組みを評価する一方、この時期の詩文には、近代の「文学」観念にも通じるような、表現そのものへ向かう「文学意識」が見られることをも強調する。

その牧角氏の書に対する和久希氏の書評（『六朝学術学会報』20）は、「二十世紀は「文学」の時代であった」という示唆に富む一文で始まる。二十世紀には、種々の文学全集が盛んに編まれ、中国古典文学も、やがて訓読体を離れた現代日本語訳で受容されるようになった。『詩経』や『楚辞』は、伝統的な儒教的解釈から解放され、中国における文学の源、世界の古代文学の一つとして位置づけられた。文学研究は、そのような普遍的な文学的価値の構築に貢献するものであった。牧角氏は、渡邊氏に啓発されてそれとは別の道をめざしながら、なお「文学」を探究したい思いもあり、それがときに論述の未整理をもたらすように見える。ここから今後どのような研究が展開するか注目したい。

矢田尚子『楚辞「離騷」を読む 悲劇の忠臣・屈原の人物像をめぐって』（東北大学出版会）は、「離騷」を屈原の作とする伝統的解釈はもとより、シャーマニズムと結びつける近代の解釈をも退け、「王者たらんとする人物」の物語と再定義した上で、漢代にそれが悲劇の忠臣の文学へと組み替えられるさまを示す。

二十世紀の文学研究が『詩経』や『楚辞』を儒教的解釈から解放した際、それに代わる「本来の」コンテクストとしては、宗教学や文化人類学などの知見が、外部から新たに導入された。そこには、古代歌謡を通じて、過ぎ去った古代の姿を、さらには人類の心の基層を見ようとする強い動機があった。しかし矢田氏は外部からコンテクストを持ち込む方法を極力避け、中国古代の文献によって実証しようとする姿勢を貫く。考察の範囲が「離騷」以前にさかのぼらず、後半で専ら漢代を扱うのも、テキストを古代文化復元の道具としない態度によるのであり、そこに本書の成功もある。他方、王者の物語の基盤は何か、楚辞とは何かという問いに答えるには、自ずと別のアプローチが必要となろう。

二十世紀は、文学の時代であるとともに、古代を「発見」した時代でもあった。いま古代文学を研究することは、二十世紀の知とどう向き合うかということでもある。二十世紀の理念を対象に押しつけるような態度はもはや通用しないが、一方で、二十世紀がめざした普遍的な知を、単に過去のものとして葬り去ってよいのかという問いも、また重い。

関連する領域から2冊挙げる。高橋あやの『張衡の天文学思想』（汲古書院）は、失意の文学とされてきた「思玄賦」について、占卜の場面や星座の列挙に着目し、宇宙を巡りつつ自己を振り返る姿を見出す。これまでの文学研究では、むしろ「帰田賦」にお

ける私的世界への志向が注意されてきたが、宇宙と対峙する張衡の思索の雄大さに改めて気づかされる。

王小林『古事記と東アジアの神秘思想』（汲古書院）は、もとより日本文学の研究書であるが、『日中比較神話学』（2014）の著もある王氏は、中国古代にも深い造詣を示す。文献学と神話学に加え、古代中国出土文献の研究動向にまで注意を向け、古代における伝承の形を考えようとするその視野は、旧来の和漢比較文学研究はもとより、東アジア的視座からする現今の日本上代文学研究の枠をも大きく超える。（谷口 洋）

### 三、魏・晋・南北朝

まず、川合康三・富永一登・釜谷武志・和田英信・浅見洋二・緑川英樹（訳注）『文選 詩篇』（一）（岩波文庫）が2018年1月に刊行されたのを皮切りに、2018年中に（四）までが刊行されたことを取り上げたい。『文選』の現代日本語による訳注は、全訳としては「新釈漢文大系」（明治書院）および「全釈漢文大系」（集英社）に収めるものがあり、すぐれた抄訳もあったが、文庫本によるものはない。『文選』に熟した六氏によって共同で行われたこの訳注は、わかりやすい訳と要を得た注、詩意の明快な解説によって、これまでより格段に広い読者に向けて『文選』の扉が開かれた年として記憶されてよい。『文選』では詩は巻十九「補亡」から始まるが、訳注はその巻順に沿って行われ、巻末ごとにコラムを設ける。訳注のみならず、第一冊末の解説や巻末ごとのコラムからは、『文選』の詩篇が示すこの時期の文学がどのようなものであるのか、なるべくその相貌を維持したまま、現代の読者に伝えようとする姿勢がうかがえ、文庫本であることを生かしながら、文学研究の水準のありかを示すことに成功している。

論著として正面から『文選』に取り組んだものとしては、牧角悦子『経国と文章 漢魏六朝文学論』（汲古書院）がある。すでに「先秦・漢」の項に言及があるので、限定的に述べるにとどめるが、序章のタイトルを「文」から「文学」へ—中国文学史における六朝の意義」とするように、「六朝」という時代の特徴を「文」という観点から明らかにしようとする方法は、従来の六朝文学研究の方向性を継承しつつ、「文」とは何か、「文学」とは何であるのかという問いを掘り下げること、新たな地平を開こうとするものであろう。後世に『文選』が権威となったゆえんがいわゆる「文学性」ではなく「文」としての「実用性」にあるとする著者の指摘も、その「実用性」とは何か、「文学性」とは何かという問いを誘発する点で、中国古典文学の核心に迫るものと言えるだろう。

一方、栗山雅央『西晋朝辞賦文学研究』（汲古書院）は、『文選』収載作品の中でも雄編として知られる「三都賦」について、成立までの流れ、それ以後の都邑賦、賦の書写材料としての紙、賦の注釈や評価なども含めて、「三都賦」の価値はどこにあるかを明らかにしようとする全面的な作品研究である。学位論文のテーマとして辞賦文学を選び、文学のみならず歴史や思想も含めた多方面の研究成果を取りこんだ多面的な分析によって「三都賦」の実像を示した著者の研究は、作品研究という場においても「文学性」の探究にとどまらない新たな段階への到達がすでになされていることを示すだろう。

安藤信廣『聖武天皇宸翰『雑集』「周趙王集」研究』（汲古書院）は、正倉院御物の『雑集』に収められた北周の趙王宇文招の文集の抄録である「周趙王集」の訳注と研究である。趙王が庾信に学んで強い影響を受けたことは史書に指摘があるが、文学的修辭のみならず仏教思想にも及ぶ南北朝の「文化的接触」であったというその実態は、本書によってようやく明らかにされた。

池田恭哉『南北朝時代の士大夫と社会』（研文出版）においても、たとえば第八章「恒山之悲」について一典故と用法」などで、南北朝の文学面での交流、さらに日本への伝播について注意が向けられる。（齋藤希史）

#### 四、唐・宋

唐から宋にわたる著作としては、齋藤茂『唐宋詩文論叢 天葩 奇芬を吐く』（研文出版）が挙げられる。中唐から南宋に至る時期の古典詩文について、書き下ろしの「韓愈の新しさ」に始まって、李観・白居易・劉禹錫・李商隠・蘇舜欽・蘇軾・王十朋を取り上げて論じ、「中晩唐期の詩人たちの新たな工夫のあり方と、宋代の士人たちの継承のさま」が描かれる。「附論」として「唐詩における芍薬の形象」「楊万里の詩文集『楊文節公集』について」を加える。唐から宋への流れをゆるやかにつなげていく叙述には、著者のたしかな文学史観がうかがえる。

唐詩の研究では、矢嶋美都子『唐詩の系譜 名詩の本歌取り』（研文出版）が、「です・ます」体で書かれたやわらかな筆致と「本歌取り」というなじみの深い用語によって、名詩がなぜ後世に手本とされるのか、そして実際にそれがどのようにして新たな詩を生むのかを論じる。著者が言うように「本歌取り」はたしかに和歌のみならず詩作の方法としてもつとに意識されているにもかかわらず、研究としては往々にして典故を遡るほうに意が向けられがちで、いわば枝分かれしていく川下へと下っていく著者の方法は独自のものであろう。そもそも文学の営み自体が「本歌取り」の連鎖であるとも言え、その意味でも本書は多くの示唆を与えてくれる。

松原朗（編）『杜甫と玄宗皇帝の時代』（勉誠出版）は、文学研究のみならず、歴史や思想、美術など、さまざまな観点から杜甫のおもに前半生とその時代を19篇の論考によって描いた論集。全体は「杜甫が生まれた洛陽の都」「玄宗の時代を飾る大輪の名花＝楊貴妃」「唐の対外政策（唐の国際性）」「杜甫の出仕と官歴」「杜甫の文学—伝統と革新」「杜甫の交遊」の6部から構成され、杜甫を理解する上でも、また盛唐という時代を理解する上でも重要な視点が適切に配置されている。

宋代については、内山精也『宋詩惑問 宋詩は「近世」を表象するか?』（研文出版）をまず取り上げよう。全24篇、450頁に及ぶ大冊は「宋詩は「近世」を表象するか?—新しい詩人階層の興起と出版」「宋詩と江湖」「蘇学余滴」「読書雑識」の4部から構成され、前半の2部に著者の近年の研究の方向が示されている。とりわけ最初の2篇、「宋詩は「近世」を表象するか—江湖派研究事始 その一」「宋代印刷出版業の発展と宋詩の「近世」化現象—江湖派研究事始 その二」はもともと1篇の論文「古今体詩における近世の萌芽—南宋江湖派研究事始」（宋代詩文研究会江湖派研究班『江湖派研

究』第1輯)として発表されたマニフェスト的なもので、著者の研究ならびに宋代文学研究の新しい方向がここに宣言されていると言えよう。著者による「江湖派」への着目は、もとより文学流派としてのそれというようなものではなく、「近世化」(「世俗化」「通俗化」という大きな視野からなされるものであるがゆえに、担い手としての「非士大夫知識人」、出版業との関係、文学言語の変容など、考察は時代の総体的な把握へと向かう。さらに第I部末の「南宋江湖詩人の存在意義」では、文学史における伝統的な「下降史観」と近代における「進歩史観」(ジャンル交代史観)に「がんじがらめ」になっている状況を打開する契機として江湖派研究が位置づけられ、後述の「元・明・清(詩文)」の項が指摘するようにこの時期の研究が白話文学に偏っていることに対して、「近世詩」という「フレーム＝価値基準」によって乗り越えることが可能だとする。

宋代文学研究における新しい潮流への指向は、ひとり内山氏だけのものではない。内山氏が総説として「詩集の自編と出版から見る、唐宋時代における詩人意識の変遷」を寄せている東英寿(編)『宋人文集の編纂と伝承』(中国書店)は、東氏を代表とする科研費メンバー(他に浅見洋二、萩原正樹、中本大の各氏)による論集であり、「文集」がどのように編纂され、どのように伝承されたかという問いを軸にさまざま「文集」や作品の編纂や伝承についての議論がなされるが、ここにも従来の枠組みを超えて、この時代の文学とそれにかかわる事象を総体として把握しようとする指向が見られる。共同研究の大きな成果と言えよう。(齋藤希史)

## 五、元・明・清(詩文)

この時代の伝統的詩文の研究は、戯曲小説(白話文学)の研究に比して少ない。これは、唐宋で一定の成就をみた(近体)詩は、この時代すでに生命力を失い、作品価値が低いとする見方の影響や、現存資料が繁多・未整理であることから研究着手への敷居が高いことなどが、理由だろうか。だが、前者であれば、ならば文言で書かれた散文の研究はもっと盛んに行われてしかるべきだろうし、後者に関しては、戯曲小説に関しての活発な研究状況がある。とすると、やはり詩文研究は、唐宋以前の分厚い文学的伝統を踏まえねばならないことから、時間がかかるとして敬遠されているのだろうか。

かくあれこれ思案するのは、海外に於いては元明清(+民国)を扱う優れた研究書が陸続として出版されているからである。以下に一例のみを示す。

李孝悌(著)、野村鮎子(監訳)『恋恋紅塵 中国の都市、欲望と生活』(台湾学術文化研究叢書)(東方書店)は、明清から民国にいたる江南の文化史に関する優れた論考。原著は2008年発行。著者は、歴史、思想、宗教、伝統的詩文、戯曲小説等々のジャンルを軽やかに乗り越え、歴史の流れ・王朝交替、民衆・知識人のあり方、トポスとしての都市といったテーマを語り精彩を放つ。第一章「明清文化史研究の新課題」は、主に港台・欧米の学者がどういう問題意識を持っているか参考になる。ここに言及される英文の諸文献は、日本の研究者が分担してでも、内容を把握しておくべきものではないか。本著については、大平桂一氏(『中国21』50)、武田雅哉氏(『東方』461)の書評も参照。

一方、日本の研究者も着実な研究を進めている。それが周辺領域の研究から詩文へと



迫るものが多いのが近年特徴的である。

例えば、小路口聡（編）『語り合う〈良知〉たち 王龍溪の良知心学と講学活動』（研文出版）所収の内田健太「〈唐宋派〉と公安派詩学—王龍溪を基点として」は、いわゆる唐宋派と公安派とをつなぐ論理について考察したもの。明代良知心学の研究を基礎とし、日本漢学も視野に入れつつ論じた論文で、テキストの丹念な読解が思想か文学という垣根を越えている好例。本論文のみならず王畿の講学活動の検討は、以後さまざまな方面へ発展する可能性を含むだろう。

史学・文献学研究の方面から切り込んだのが、野村鮎子（編）『列朝詩集小傳』研究』（汲古書院）である。書名だけから見ると、詩集の版本研究の一種のように誤解されそうだが、内容は史的考証を基盤にした文学研究書。800頁を超える大著である。『列朝詩集』は錢謙益が編纂した、明代詩人の略伝と詩篇を収録したもので、後世の明代文学観に大きな影響を与えた文献であるが、錢謙益による意図的な資料の取捨選択・改竄が行われていることも知られていた。本書ではその中から約40名の代表的詩人の伝記を取り上げ、実録資料や他者の別集なども用いて入念な史的考証を行い、加えて文学的評価の観点からも検討を加えた。その結果、錢謙益の具体的情報操作の実態のみならず、明代詩人の基本的文学者像も明らかになった。明代文人・官僚の伝記・文学について調べる際には、まず本書を参照するのが捷径となろう。

大木康『馮夢龍と明末俗文学』（汲古書院）は、後述の「元・明・清（戯曲小説）」にも関わるものだが、ここで紹介しよう。全体は第一部「馮夢龍人物考」、第二部「馮夢龍作品考」、第三部「馮夢龍と俗文学をめぐる環境」からなり、明末通俗文学の立役者の一人であった馮夢龍その人と、当時の俗文学をめぐる環境に関する論考を集める。著者の関心は幅広く、第一部では史料を駆使して、馮夢龍の事跡・評価を網羅し、その人物像を浮き彫りにする。第二部では具体的な作品分析を通して、馮夢龍の作品の編纂意図、作品中の人物表象などを考察する。第三部は馮夢龍を取り巻く文学環境、例えば読者の問題、庶民文化の問題などについて考察する。著者は、詩文と戯曲小説は表裏一体ではないかと述べ、第一部、第三部では、広い視野での江南文学の分析がなされる。本書はひとり馮夢龍個人の研究に止まらず、文献学・社会史等の研究も交え、大きくくりでの文学の姿を示そうとする労作である。（田口一郎）

## 六、元・明・清（戯曲小説）

大賀晶子『明代短篇小説と戯曲の研究』（汲古書院）は、学部の卒業論文で文言小説である『剪燈新話』を取り上げてから、白話の短篇小説、戯曲へと関心の範囲を拡げ、いわばジャンル横断的に、元から明にかけての文学作品を検討してきた著者の論文集。

伊藤晋太郎『「関帝文献」の研究』（汲古書院）は、元代以降さかんに編纂出版された「関帝文献」についての研究。ここで「関帝文献」とは、例えば元の『新編関王事蹟』、明の『関帝祠志』など、関羽／関帝の伝記や伝説、関羽／関帝に関する評論や詩詞などを集録した文献を指す。こうした文献は、関帝信仰に関する重要な資料であるばかりでなく、小説『三国志演義』と相互に深い関係を有する資料でもあり、『三国志演義』研

究の視野をより広げたといえるであろう。

仙石知子『毛宗崗批評『三國志演義』の研究』（汲古書院）は、『明清小説における女性像の研究 族譜による分析を中心に』（2011）に続く著作。著者には、『三國志』の女性たち』（2010、共著）もあるが、ここでは『三國志演義』の通行本である毛宗崗批評本という一つの版本に的をしぼって、その評語などにあらわれた女性観、家族観を浮き彫りにした。2017年12月の刊行であるが、ここで触れた。

中国古典小説研究会編『中国古典小説研究の未来 21世紀への回顧と展望』（勉誠出版）は、2016年に神奈川大学において開催された同題のシンポジウムの記録である。現在でも活動が続いている中国古典小説研究会の最初の活動といえる野辺山合宿が行われたのは、1987年のことであり、それからおよそ30年の月日が経った。この間、日中学術交流の深まりもあり、古典小説研究は質量ともに大きな進展を見せた。本書は、そうした30年の研究を具体的に総括し、将来を展望するためのよい資料になっている。中国においても、80年代の小説研究を回顧する会が、復旦大学の黄霖教授によって開催され、『我們起跑在80年代』（2016）が刊行されている。本書と合わせ読むと、この30年の中国側の研究動向がよくわかる。

二階堂善弘（監修・翻訳）・山下一夫・中塚亮・二ノ宮聡（翻訳）『封神演義』（勉誠出版 全四冊）のうち、第三巻、第四巻が2018年中に刊行され、完結した。また、田中智行訳『金瓶梅（上）』（鳥影社）が刊行された。中国古典小説の翻訳であれば、岩波文庫や中国古典文学大系などにそろっており、それを読めばよいだろうとはいうものの、翻訳にも賞味期限があるといわれ、また研究には進展があつて、新しい研究成果を反映した翻訳も必要である。『封神演義』は、本格的な学術的背景を持つはじめての翻訳であるし、『金瓶梅』の方は、これまで省略があつたものをすべて翻訳したり、またアメリカで完成したDavid Royの英訳を参考にしたりと、新しく盛り込まれた内容は少なくない。2018年は、古典小説翻訳の当たり年だったといえるかもしれない。なお、2019年3月、早稲田大学において中国古典小説研究会によるシンポジウム「中国古典白話文芸の再生—翻訳・翻案の歴史・現状・展望」も行われた。ちなみに海外でも、Patrick Hananの遺稿である*Quelling the Demon's Revolt*（2017。二十回本『三遂平妖伝』の英訳）、Robert Hegelによる*Idle Talk under the Bean Arbor*（2017。『豆棚閑話』の英訳）などが刊行され、なかなか盛んである。

康保成（主編）「海内外中国戯劇史家自選集」として『竹村則行 井上泰山 小松謙卷』、『福満正博 岡崎由美卷』（大象出版社）が刊行された。これは、中国国内、また欧米も含めて世界中の中国戯曲演劇研究者による自選論文集である。日本人研究者の外国語による発信として、こうした出版物を歓迎したい。（大木 康）

## 七、近現代

2018年の近現代文学研究では論文集に注目すべき成果が出た。『中華文藝の饗宴』（研文出版）は、副題にある『「野草」第百号』のとおり、中国文芸研究会の会誌『野草』第百号を単行本として出版したものである。中国文芸研究会は主として中国近現代文学

を研究する人々による研究組織で、すでに半世紀の歴史をもっている。この論文集には合計 14 本の論文が掲載されているが、人選から論文内容にいたるまで、綿密な編集がなされている。その背景にあるのは、中国文学研究を志す学生が減少していることへの危機感であるという。中国文学研究の面白さをアピールすべく、若手から中堅の研究者を執筆者に選び、個々の論文のテーマの多彩さを承認した上で、すべての執筆者に「文学史的視野」を意識するよう要請した。その結果、14 本の論文は、それぞれの形で、これまでの文学史研究を踏まえた上で、新たな視野を付け加えたものとなった。

『幻境』（中国文庫）はそれに対してすでに名をなした研究者による同人誌である。同人として 7 名の名前があがり、創刊号にはその中から下出鉄男、坂井洋史、小谷一郎、下出宣子、谷行博、中井政喜の各氏の論文と翻訳が掲載された。下出氏によると、誌名の「幻境」には、束の間の「時間」を超えた「希望」への願欲が込められているという。それは昨今の日本の中国研究、さらには日本の言論状況が狭い「時間」に閉じ込められていることへの批判でもある。個々の論文は題材もスタイルも異なるが、いずれもこれまでの自身の研究成果を踏まえ、厳格な学問的態度を守りながら、目の前の言論状況と切り結ぶ強い意識を示しており、日本の中国近現代文学研究の伝統を良い意味で蘇らせようとする意欲が見て取れる。

『越境する中国文学』（東方書店）は、藤井省三氏の東京大学退職を記念して、受業生によって書かれた論文集である。合計 27 本の論文が掲載され、4 部構成になっている。第 1 部「魯迅と同時代人」には魯迅および魯迅と同時代の中国文学研究、第 2 部「文芸市場の成熟と文学空間の変容」には文学テクストを超越した文化研究の成果、第 3 部「文学の系譜をたどって」には主としてアイデンティティを論じた論文、第 4 部「加速する文学と映像の交渉」には映画や近年の流行文学についての論考が収められている。いずれも藤井氏が切り開いてきた分野であり、同時に近年の日本の中国文学研究において様々な形で論じられてきたテーマである。

単著として最初に挙げたいのは中島長文（訳注）『周作人読書雑記』全五冊（平凡社、東洋文庫）である。これは「周作人の全著作から、彼の読書およびそれに関連する書物についての文章を選択し、翻訳したもの」（凡例）であり、翻訳ではあるものの、文章の選定に中島氏の長年の研究の成果が示され、しかも各巻に詳細な「あとがき」が付されている。内容は、読書論から始まり、歴史、地理、神話、民俗、医学、絵画、女性、児童、日本文学、西洋文学、中国新文学、さらには古典の詩文、俗文学などまで周作人の多彩な関心を網羅している。周作人にとって書物が特別な意味を持っていたことはよく知られており、それを軸として周作人の生涯を解釈した試みと考えられる。

翻訳でもう一つ挙げたいのは、飯塚容（編訳）『作家たちの愚かしくも愛すべき中国』（中央公論新社）である。高行健、余華、閻連科という世界的に高く評価されている 3 名の中国作家をとりあげ、それぞれインタビュー、対談、講演を選んだものである。この 3 名を紹介することで、彼らの文学世界を伝えると同時に、さらには中国社会の本質をリアルに伝えるドキュメントにしようとしたという。3 名の人選はもとより、魅力を伝えるためにインタビュー、対談、講演それぞれの収録作を選んだのは、編者の選

視野のたまものである。編者は近年驚異的なペースで同時代中国文学の翻訳を進めており、本書はその蓄積によって生み出された研究成果と位置づけられよう。

専著としては小山三郎『魯迅』（清水書院）が出版された。著者はこれまで政治学出身の立場から毛沢東時代の文芸政策や台湾の文芸政策を研究してきた。本書の特色は2点あると思われる。第1に日記を使うことで、魯迅の日常生活を浮かび上がらせ、同時に魯迅の内面に踏み込んだこと。第2に古典文学者としての魯迅に重点をおいたこと。じつは本書は林田慎之助氏が監修しており、小山氏が林田氏の『魯迅のなかの古典』（1981）に啓発を受けて執筆したものである。小山氏は魯迅の内面と古典文学者としての側面を結びつけ、たとえば魏晋の文人に対する魯迅の思考が、作家人生において大きな意味を持ったと論じた。個々の論点はこれまでも指摘されてきたものの、その視点によって作家生活をまとめたところに、本書の特色を認めることができる。

文化研究の分野では、星野幸代『日中戦争下のモダンダンス』（汲古書院）がある。本書は中国近代におけるモダンダンスを扱った日本で最初の専著である。日中戦争下と時代を区切り、中国だけに限定することなく、中国大陸、日本、台湾、朝鮮半島を様々な形で移動しつつげたモダンダンスを論じた。著者によれば、当時のモダンダンスは何らかのプロパガンダであったという。本書は、モダンダンスと権力の関係に注意しつつ、舞踏家たちの相互の関係性を重視して、各地で展開されたモダンダンスの動機や背景を論じた。著者は中国文学研究からスタートした研究者であり、モダンダンスを論じた本書でも、文学との関係性を含めた幅広い文芸の視点から議論がなされている。

近年この分野においても学際化が進んでいることは言うまでもない。武田雅哉（編）『ゆるるおっぱい、ふくらむおっぱい』（岩波書店）は、「乳房」をテーマにした共同研究の成果である。編者の武田氏をはじめとする中国文学研究者と、北海道大学スラブ研究センターなどの研究者が集い、中国、ロシア、日本の乳房に関する比較文化研究を行った。中国に関しては、武田氏が図像学の視角から乳房に関する文化史を執筆し、濱田麻矢氏が現代文学における乳房の表象を論じ、田村容子氏が近代中国の京劇における男旦の身体について論じた。すなわち本書は、図像学、ジェンダー論、身体論など多様な視角と、日本やロシア・西洋など横の比較を交えた研究成果である。

最後に、関連する成果を挙げたい。一つは日本近代文学の成果である。近年、日本文学研究において「外地」の日本語文学の研究が飛躍的に進展している。中国文学研究においては主として満洲や台湾の文学活動が研究されてきたが、近年の日本文学研究では、新しい資料が続々発掘され、研究が深められている。2018年の成果として挙げるべきは、日中戦争末期に上海で発行された日本語総合雑誌『大陸』が秦剛氏によって発掘され、『早稲田文学』2018年初夏号に発表されたことであろう。戦時中上海に残って当地の中国文壇の重鎮となった陶晶孫も文章を寄せている。この分野については、今までも植民地文化研究や上海文化研究の立場から共同研究がなされてきたが、今後も研究を進展させる余地が残されている。

『高橋和巳の文学と思想』（コールサック社）は、戦後日本文学者であり、同時に中国文学の研究者でもあった高橋和巳の全体像を論じた論文集である。中国論については、

池田恭哉氏が高橋の阮籍・嵇康研究について論じ、関智英氏が小説に描かれた満洲国・中国占領地への眼差しを論じ、張競氏が高橋による文化大革命の視察記録の再読を試み、戴燕氏が中国の立場から高橋の生涯をまとめ、王俊文氏が竹内好や武田泰淳との関係を軸として高橋を中国研究の系譜の中に位置づけた。近年の竹内や武田についての研究と比すると、高橋の中国研究者としての側面についての研究は、まだ端緒についたばかりであり、今後の研究の深化が期待される。なお高橋については『桃の会論集』8（高橋和巳専集）（桃の会）もある。（鈴木将久）

## ●語学

### はじめに

前集に引き続き、学界展望（語学）は日本中国語学会が担当する。本稿が対象とするのは、2018年1月から12月に原則として日本国内で公刊された著書および研究論文である。ただし、重要なものについては海外で発表された研究成果についても言及する。

昨年より、学界展望（語学）は、『日本中国學會報』（日本中国学会）と『中国語学』（日本中国語学会）の両方に掲載されている。日本中国語学会の会員の中には学界展望（語学）の存在を初めて知ったという方もおられたようで、予想以上の反響があった。概ね好評を得たが、一部の会員からは取り上げられた研究成果に偏りがあるのではないかといったご意見も頂戴した。昨年も述べたように、執筆にあたっては、担当者が興味深いと感じた研究成果を主観的に取り上げるよう努めている。本稿においても基本的なその方針に変わりはない。また、一つの研究成果が複数の部門で取り上げられることもあるが、あえて調整等を行っていない。担当者がそれぞれの観点から論評を行っている。これも学界展望ならではのおもしろさだと考えている。

分類と担当者は昨年と同様である。文字と訓詁を一つにまとめ、文法・語彙を上中古、近代、現代の三つに分けた。「はじめに」は佐々木勲人（筑波大学）、「音韻」は千葉謙悟（中央大学）、「文字・訓詁」は野原将揮（成蹊大学）、「語彙・文法」については「上中古」を戸内俊介（二松学舎大学）、「近代」を石崎博志（佛教大学）、「現代」を池田晋（筑波大学）がそれぞれ担当し、「方言」は八木堅二（国土舘大学）、「教育」は鈴木慶夏（神奈川大学）が担当する。（佐々木勲人）

### 一、音韻

音声・音韻関連の研究についてまず単著から瞥見すると、第一に平山久雄『敦煌《毛詩音》研究』（好文出版）を挙げねばならない。氏は1966年に「敦煌毛詩音残巻反切の研究（上）」（『北海道大学文学部紀要』14-3）を発表、以後その続編を『東洋文化研究所紀要』に断続的に掲載し、他にも毛詩音に関する論考を多数発表されてきた。今回一連の論考がまとめられ、かつ中国語にて姿を現したことになる。7世紀半ばから8世紀半ばにかけての音系を記録する資料に関する総合的な研究であり、現代日本の漢語音韻